

## 文政度幕府の蝦夷地經營中止に關する考察

井野邊茂雄

寛政年間幕府が東蝦夷地を直轄し、尋で西蝦夷地に及び、經營の事に着手するや、治蹟見るべきものが多かつたけれども、文政四年十二月に至り再びこれを松前に還附した。是に於て松前奉行は廢職となり、南部津輕二藩の警衛も罷み、拓殖の事業悉く中止せられた。識者これを惜む。當時松前奉行支配調役並たりし松田傳十郎の述懐の歌に、

骨折りし廿四年のあじ餅を

きなこくるめて應にとらるゝ

とあるのを見ても、當局者の感想が偲ばれる。實際多年苦心の結果、經營漸く其緒に就くの際、中止の命令に接したのであるから、悲痛の情を抱いたに相違ない。然らば幕府は何が故に、當局者の苦心を葬り、蝦夷地を放棄したのであらうか。松前氏復領の時の遂に、

其方儀、最前蝦夷地之手當行届兼、難拾置様子に付、東西蝦夷地追々上地に被仰出、年來從公儀

御所置被仰付候處、奥地島々迄連々御取締相整、夷人撫育、產物取捌等、萬端居合、御安堵之事に候。其方儀、彼地草創之家柄、數百年之所領に候得べ、舊家格別之儀を被思召、此度松前蝦夷地一圓、如前々可被返下旨被仰出候、彼地是迄之主法、無遺失相守、異境御要害之儀、嚴重に可取計之旨御沙汰候。

とあり、表面は幕府の手によつて蝦夷地の取締も整ひ、夷人の撫育、產物の取捌も行届き、最早心配もなくなつたから、舊の如くこれを領せしむるといふのであるが、裏面には尙ほ複雑なる事情が纏綿してゐる。其第一は松前氏の運動であつた。この事は、大體に於て世上周知の事實である。即ち藤田東湖は、これを去ること遠からざる天保十年に、松本胤通の談話を揚げ、

斗機藏

○松本胤通

曰、子松前氏舊領に復する所以を知るや。余曰く知らず。然れども推察するに、松

前家梁川に移され、大に困みたるより、財を盡し當路へ賂ひ、其望を達せしならん。斗機藏曰、然り、外患の事は年來苦心する故、嘗て事柄を究めたるに、この事水野羽州○忠成執政の時なれども羽州も知らず、全く特意より起りたる由、其原は一橋儀同公○治へ松前家より内願し、公より將軍家御内聽ニ入たるならん。時の松前奉行は高橋越前守○重賢なり。これも前日迄夢にも知らで

ありけりとぞ。

○東湖側見聞筆

といつてゐる。一橋治済の斡旋は、誠にこの通りであるが、老中水野忠成が知らない間に決定した

とあるのは、松本胤通の誤解であつた。此時の實情は天保五年老中大久保忠真から、水戸齊昭に寄せた書翰に、

蝦夷地之儀ハ、……寛政之度一旦御領に相成、其御威徳に迫々化候姿にも及候處、文化四年一變

事○露人の暴行をいふ 其後度々船を寄候而、色々御引合共有之、然處文政四年に至り、松前氏へ御戻しに

相成候。

但是の御深慮之事哉、其利害得失之論に不及、頻而御戻しと申事ニ御座候。

また他の一通に、

文政之度無評議、實は被差戻候程之義は、先日申上置候○中略

北地は南部津輕之地を限り、蝦夷は風俗異にして、本朝之風化に不從、又異國へ接候地、是より手を附ルと、又彼より手を入向々附近候。神祖以來享保中とても、御手を不被附候が宜、其間の

海を境として被差置候事、第一との説を、神田橋○一橋治濟へ文政中に建白之筋有之よし。羽州○水野忠成

も夫に乘じ、此人素々海外は間故、旁當座之苞苴等に眩し、其邊に而旁此説深入いたし居候哉に、密々耳に入候儀に有之。松前氏へ被託置候ほど、太平外患は無之と申説を被信用候儘に而、此節有之歟に、冥々中ニ被愚考候。此儀は先日來申上候。

とあるが如く、松前氏から一橋治濟・水野忠成への運動の結果、忠成の專斷を以て、かの如き國家

の重事をも「其利害得失之論に不及」、また老中等の衆議にもかけなかつたのである。當時幕府の實權を握れる水野忠成の政治が、如何に公明を缺いてゐたかを推察することが出來よう。蓋し忠成は蝦夷地の開拓が却て事端を開くの恐あるが故に、寧ろもと通り松前氏に預けて平和を保つが宜いといふ入説に傾聽せるのであつた。

抑も蝦夷地の開拓を不可とする意見は、早く寛政時代より行はれ、中井履軒は、蝦夷地の如き不毛の地が、日本と露西亞との間に横はつてゐるのは、自然の防禦地帯を爲すものである。之を開拓せば、入侵の患を招く恐があると稱し、松平定信なども一時此説に傾いてゐる。文化年中、山片蟠桃もまた履軒と同説を唱へた。而してかゝる意見が、當時相當の勢力を有してゐたことは、松前奉行たりし羽太正養の邊策私辨に見えてゐる。

北風や日本の火除蝦夷が島

とは寛政文化の交に流行せる俚諺であつた。因循姑息、泰平を粉飾することにのみ苦心せる水野忠成が、かゝる俗見に捕らはれたのも、蓋し怪しむに足らざるところであらう。

第二は外警に對する意識の衰頹である。

天明寛政の交、露國南漸の勢力を感知し、始めて外警に關する杞憂を抱き、世人を戒めた者は、二三の識者に過ぎない。然るに文化年間に入りて、北に露人の暴行があり、西に英人の狼藉あるに及

び、漸く海外の壓迫を感じること多く、處士の横議もまた日を追て盛んになつて來た。されど露人の暴行に原因せる日露の葛藤は、間もなく平和の解決を得て、千島の白波再び起らず、而して英人の狼藉も、實は日本に對して惡意を挾めるにあらざることも明かとなり、且つ時は正に江戸幕府二百余年の隆治其極に達し、世を舉げて歡樂に耽り、泰平に酔へる際であるから、外警の遠ざかると共に、これに對する杞憂も自から頽弛した。我等は今こゝに、文政時代の世相を描寫する邊を有しない。暫く松平定信等の筆を借りて、當年における國民の意識が、如何に衰へてゐたかの一斑を考察して見よう。

文政十年松平定信が姿心錄を著はして、外患の恐るべきをいへるが中に、

少し口きくものらのいふ、異國船の來るなど聞く毎に、何かと心をくだきぬるは、小量の故なりとさとりぬ。いかんとなれば、江戸の咽喉たる總房相州の間などは、御三代のうち何かと御定めもあるべきに、左も聞えざるはいかにと、疑惑はれざるなんどいふ者多きが……

これ江戸の灣頭に防禦を設けることの必要なるを論ずる者のあつた證據である。嘗て定信が老中たりし時、江戸灣の防備を修めようとして巡見するや、世上或は晴天に雨傘なりと評するものがあり、又中井履軒は、同地に砲臺を築くを聞いて、

今度白川侯の建議にて、房總並浦賀邊へ、臺場を新築せらるゝよし。是は定めて仙臺林子平が海

國兵談に、江戸日本橋より唐蘭まで、境なしの水路なりと云たる説を用ひ給ひしと見ゆ。某が意には、水路ゆへ憂なしと思ふ。

といへることもあつた。思ふに履軒の亞流は、此頃にもなほ多かつたのであらう。定信また曰く、凡智のものらは、とにかくうへみぬ驚の心にて、只我尊とし我國強大なりと、小量淺陋の心より思ふが故に、わが火術我が大銃を以て、寄せ來る所の異船をば、立どころに打碎くべし、我がうる所の長沼流甲州流などの軍備に、かつものあるべからずなど、かつて敵をはかることをもせず、外國はいつも、かの文祿朝鮮の軍の如く、日本人かつべきものと心得、萬一襲來するも、聊か恐るゝに足らずといふ類ひは。實に醉中の放言、夢中の狂言にて、いふに足らぬ事也。

これ平山行藏の如く、兵器軍艦の改善に、反對意見を有せる輩に對しての評語なるべく、而して當時かゝる考を抱ける者は尠くない。頼山陽の如きは其一人であつた。定信又曰く、狹隘なる性の者は、只今日に安んじて、餘所の事を知らざるが故に、海は品川の如く、川は大川玉川の如しと思ふばかりにて、思慮も只目先の事を爲し、かつて遠慮遠謀に及ぶ事は、益なしと心得るやうになり、敵はいつも我が流の注文の如くして來るべしと思ふ輩もありて、かつて廣く考へ、遠く慮らざる様になりゆき……

これ苟安を旨として、國家百年の計を爲すを怠る者の多きを歎息したのである。定信又曰く、

文化のはじめの頃、蝦夷の遠島にて、ロシアの船人騷擾せし時、都下の人情大に騷動せしかば、既に至つての遠島の事、かつて驚くべからずなど、町ぶれありし程に、様々浮説もありし事なりき。近頃又異船相州の御備場近く來り、或は浦賀へ來りし事などありしが、させる浮説もなく、人情尤も靜かなり。

日露の紛擾治まりてより以來、世人はたゞ泰平を謳歌するのみ、異國船の渡來も、何等の刺激をだに、民心に與へなかつた有様を推察することが出来る。

我等はまた、會澤蕙齋の筆に於て、同じ世相を發見する。文政八年に成れる新論を按ずるに、數種の姑息説が擧げである。其一に曰く、

偷安之徒動謂、彼爲漁爲商、固其常事、不足深慮焉。

其二に曰く、

庸俗又謂、自昔神州之兵、精銳冠萬國、夷狄小醜、不足憂焉。

其三に曰く、

庸俗又謂、虜絕海遠來、其兵不得甚衆。自試螳臂、不足憂焉。

以て苟安の世情を窺ふべきである。但其一と其三とは、當年における實際の有様であるから、誤解とは稱し難いけれども、歐州の勢力漸く我國に迫り、よくせざば國家の將來をも、危地に陥れる恐

あるの際、かゝる理由に基いて、或は革新の治を妨げ、或は防備を怠るの念があるならば、眞に憂ふべき現象といはなければならぬ。蕙齋が此點を指摘して、世を戒めたのは寧ろ當然である。

我等は更に賴山陽の意見を徵するに、其邊防を論じて曰く、

考彼防寇之策、不過曰屯戍而已。是其盜之來、有方所也、無方所者、屯戍不可用、然吾知其不足用也。

又曰く、

太凡我邦人之防寇、每不審彼我之勢、視彼過重、內自勞敝。

其火技を論するや即ち曰く、

海内言兵者、莫不偏於火技、火技以其大且勁者爲貴、曰有努則弓不足用、有銃則努不足用、有大礮則銃不足用、苟有此物、無敵於天下、而吾常以爲不然。

又水戰を論ずるや即ち曰く、

夫小有小之利、大有大之不利、大之不利、進退不便也。合不輒合、分不輒分也。小之利、欲進則進、欲退則退、欲合則合、欲分則分。我之船、小而不合、則彼之礮、難於命中。而彼之船、大而不分、則我之銃、仰發無虛丸。況我之海岸、遠斥多礁、彼大者、每膠於淺。淺我小者之所利也。我能動而彼不能動、倏忽聚散、擾而敵之可矣。彼乘潮而進、我縱其進、而出其背可矣。彼之礮、

利於及遠、我募敢死、梯上其艦、短兵迫鬪、使彼不暇發可矣。彼或舍船上陸、我正兵壁岸、奇兵繞奪其艦可矣。苟能辨於此、艦不必造也、礮不必設也。船與銃、皆仍其舊、而操之用之者、講而習之而已。○通議

これ要害を擇びて屯戍を置くを非とし、且兵器軍艦を改め、海軍を振興しなければならぬといへる林子平等の主張を喜ばないものであり、又其「不審彼我之勢、視彼過重、内自勞敝」といへるは、幕府が國防を修め、蝦夷地を經營することを指せるのであらう。山陽嘗て長崎に遊び、「荷蘭船行」の長詩を賦したるが内に、

蠻情難測廟謀勞、兵勞猶不撤豹韜、嗚呼小醜何煩憂目蒿、萬里逐利在貪饕、可憐一葉凌鯨濤、譬如浮蟻慕羶臊、毋乃割鷄費牛刀、毋乃瓊瑤換木桃。○山陽詩鈔

ともいつてゐる。山陽の西洋諸國を見ることがかくの如く、國防上の施設を評することかくのごとくであつた。時勢に對して相當の注意を拂へる識者でさへなほ然りとせば、其他は推して知るべきである。

文政年間に於ける國民の、外警に對する意識が衰へ、人心が遲鈍になつてゐたことは、ほゞかくのことである。水野忠成が蝦夷地の經營を放棄したのも、蓋し時勢の影響に過ぎない。

最後に我等の注意しなければならないのは、近時史家の間に行はるゝ考察である。其說に曰く、

幕府が蝦夷地を松前氏に還付したのは、其拓殖警備の爲に費すところ巨額に上り、當時の窮乏せる財政に於て、之を負擔するに堪へなかつたからであると。而して此見解は多數の承認を得たるものゝ如く、未だ嘗て何人も異論を唱へたものがない。抑も文政度の幕府が、歳入の不足を感ずること甚しく、僅かの貨幣の改鑄による出目の収益を以て綱縫せるは、疑ふ可からざる事實であつた。しかし蝦夷地經營の費に苦しんだとの説は、再吟味の必要がある。

はじめ幕府が、寛政十一年東蝦夷地を當分御用地とした時には、毎年五萬兩を下付してゐる。尋で享和三年全くこれを收公するに及び、拓殖費二萬五千兩、官吏手當一萬兩、松前氏への下賜金三千五百兩夷蝦夷地上知の代として授くる所と定め、拓殖費二萬五千兩の内二萬兩は、蝦夷地產物の代金を以て、之に宛て、不足の五千兩は、官吏の手當、松前氏下付金と共に、幕府から支出することにした。然るに產物の収益が年々増加したので、文化三年以後、五千兩の補給と、松前氏下付金の支出とを停め、官吏の手當も五千八百兩に削減してゐる。其後文化四年、西蝦夷地をも直轄してからの財政状態は、審かでないけれども、拓殖の功次第に舉り、収益も増加せるが故に、實際幕府の負擔した金額は、大したものではなかつた。それは文政六年八月勘定奉行遠山景晋の調査せる、蝦夷地經營に關する收支決算書によつて知ること出来る。此決算書は、予が十余年前大藏省の文庫で發見した。恐くは大正十二年の震災の時焼失したらうと思ふ。其要點を擧ぐれば左の如くである。

蝦夷地經營に關する下付金

三十萬二千九百九十九兩余

但此内二萬八千兩は、露人暴行の際、仙臺會津二藩出兵費の取替金であるから、蝦夷地經營の爲の下付金は、二十七萬四千九百九十九兩であつた。

蝦夷地產物代其他諸收納金

百七十九萬六千七百一十一兩余

臨時收入

十萬七千八百十八兩余

合計二百二十萬七千五百二十八兩余

蝦夷地經營に關する諸經費

百五十二萬九千五百十七兩余

差別

六十七萬八千十三兩余

此内から蝦夷地經營に關する下付金二十七萬四千九百九十九兩余を引き去り殘額純益  
四十萬三千十三兩余

此表に現はれたやうに、幕府の支出總額は三十萬二千九百九十九兩で、總收入の内から、之と諸經費其他を控除して、四十萬三千十三兩の純益を收めてゐる。一ヶ年平均二萬兩に近い純益であつた。蝦夷地の經營が、幕府の財政を困難ならしめたといへるこれまでの研究の誤なるはいふに及ばず、もし其事業を繼續したならば、却て其困難なる財政を、圓滑ならしめる力をも有つてゐたのである。而も遂に蝦夷地を放棄したのは幕閣の中心人物たりし水野忠成の過ちであつた。蓋し日露の紛擾が解決せられてから後、また北警を聞かず、露人も暫く日本の沿岸に近づかないので、幕府をしていたく其意を安んぜしめた爲であらう。これ松前氏の請託が、其功を奏した所以である。財政問題は、蝦夷地經營の中止と何等の關係もない。此時に際し天下泰平の極に達して、上下皆無事を喜び、偷安の情は年と共に進み、外警に關する意識の衰へたばかりでなく、頼山陽の如く、外國の勢力を侮る者があり、中井履軒、山片蟠桃の如く、蝦夷地の開拓を不可とする者もあつた。「此人素より海外には闇」と同僚から批評せられたる水野忠成が、將軍の寵を恃みて、將軍徳川家齊が忠成を信任し、其言ふところは何事でも採用したこと、大久保忠真の書翰に見えてゐる。『蝦夷地の處分を專決したのも、要するにかゝる見解に共鳴するところがあつたからである。